

南部鉄器

雫石町は、17世紀に良質な鉄製品の製造が盛んだった南部藩の領地でした。鎌倉時代（1185-1333）から明治維新まで南部家の支配下にあったこの地域で作られたものは、「南部鉄器」と呼ばれるようになりました。今でも手作りの釜や鍋、風鈴などの装飾品が作られています。

1659年、京都の名工・小泉仁左衛門がこの地に鉄の鑄造技術を伝えたと考えられています。南部家の文化・産業振興のために、仁左衛門は現在の岩手県に移り住んで生産を行うことになりました。

当時、日本の伝統的な茶道で使われていた湯沸かしには、取っ手や注ぎ口がありませんでした。1750年頃、小泉家の3代目が、より便利にお湯を沸かせるようにと、取っ手と注ぎ口のついた小さな湯沸かしを考案しました。この南部鉄瓶は茶道の世界で象徴として人気を博すようになりました。茶道に深い関心を持っていた南部家の継続的な支援と、製鉄に必要な材料の豊富な供給のおかげで、地元の産業は繁栄しました。

鉄瓶やその他の手作りの鉄器は、雫石駅の観光物産センターなど、雫石のいくつかの工房やショップで購入できます。一部の製品は、製鉄技術と岩手県のもう一つの名産である浄法寺町で生まれた浄法寺漆を組み合わせたものです。漆は、日本では珍しい漆の樹液から作られています。現在、日本で使用されている漆のほとんどは外国産ですが、浄法寺漆は数少ない国産の漆で、主に国宝の修復に使用されています。

雫石町内の工房のうち1つの工房では、南部鉄器と浄法寺漆の2つの伝統工芸を組み合わせ合わせた体験教室を開催しています。ジュエリーやキーホルダーなど、オリジナルのお土産を作ることができます。